

令和 7 年度 (2025)

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
花・野菜技術センター 一年報

令和 8 年 7 月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 花・野菜技術センター

令和 7 年度
花・野菜技術センター年報

目 次

I 総 説	1
1. 沿 革	1
2. 位置および土壌	2
3. 用地および利用区分	2
4. 機 構（令和 8 年 3 月 31 日現在）	2
5. 職 員	3
6. 収入支出決算額	4
7. 建 物	5
8. 施設および備品	5
II 作 況	6
1. 気象概要	6
2. 野菜類の生育状況	6
III 事業の推進方向と成果の概要	9
1. 研究部	9
2. 技術普及室	11
IV 試験研究および地域支援等活動の課題名	12
1. 花き野菜に関する試験	12
2. 栽培環境に関する試験	13
3. 病害虫に関する試験	14
4. 地域支援に関する試験等	14
V 研修事業の概要	15
1. 概 要	15
2. 研修事業の推進	15
3. 北海道花き・野菜技術研修	16
4. 研修ほ場等作付概要	18
VI 研究発表並びに普及事項	19
1. 研究報告・資料	19
2. 印刷刊行物	19
3. 普及事項	19
VII その他	20
1. 職員の研修・技能講習、資格取得	20
2. 見学・参観	21
3. 研修生の受入れ（研修事業以外）	22
4. 委員会活動	23
5. 公開デー2025	24
6. 令和 7 年度 花・野菜新技術セミナー	24
7. 講師等の派遣	24
8. 各種委員	25
VIII 自己点検への対応	26

I 総 説

1. 沿 革

(1) 設立の趣旨と経過

当センターは、本道農業の戦略作物である花き・野菜生産の一層の振興を図るため、試験研究部門とその技術を普及する部門を一体化し、相互の連携の下に総合的な機能を果たす拠点施設として、平成 8 年度に設立された。

試験研究では、北海道立総合研究機構の農業試験場における花き・野菜の中核的研究機関として、関係場との分担を図りながら、新品種の開発、栽培技術および流通技術等に関する試験を効率的に推進し、また、技術普及・研修では、開発された新技術を重点的かつ効率的に普及指導し、地域への定着を図るとともに、生産者や指導者等に対する技術指導はもとより、「開かれた試験場」として、一般消費者をも対象とした啓発研修を行うとしている。

平成 4 年度に調査費、同 5 年度には設計費が予算化され、平成 6 年度より道立滝川畜産試験場内に研究棟などの建設、ほ場の整備が開始された。平成 7 年度には付属施設、研修寮、温室などすべての施設の建設と備品の納入が完了した。一部、幹線などの舗装工事、外構工事等を平成 8 年度に残したが、平成 8 年 3 月には「北海道立農業試験場条例」を改正、4 月に職員が配置され、業務を開始した。8 月 30 日には、北海道知事、滝川市長、農業団体など関係者を迎え、開所式を開催した。平成 9 年度より本格的に試験研究、研修などを開始し、平成 10 年度以降もハウスの移転、新設など環境の整備が進み、着実に成果をあげている。

(2) 組織機構の変遷

平成 8 年 4 月に場長以下、総務部、研究部、専門技術員室の 2 部 1 室体制でスタートしたが、場長および研修主査を除く総務部は隣接する滝川畜産試験場との兼務体制であった。

平成 12 年 4 月、道立畜産試験場の再編に伴い、場長以下、総務部の兼務体制が解かれ、専任の体制となった。

また、道立農業試験場の機構改革により、専門技術員室は発展的に解消し、技術普及部が新設され、技術普及体制の強化が図られた。

平成 22 年 4 月、22 道立試験研究機関を統合した地方独立行政法人北海道立総合研究機構の農業研究本部のを構成する一機関として、3 グループからなる研究部と総務課の体制で再スタートし、道所属の普及指導員が駐在する技術普及室が設置された。

(3) 試験研究体制と推進方向

研究部は、平成 8 年度は花き 2 科、野菜 2 科、土壌肥料科、病虫科の 6 科体制であったが、平成 12 年度に花き科、野菜科、園芸環境科、病虫科の 4 科体制となった。平成 18 年度には園芸環境科を栽培環境科と改称した。平成 22 年度からは、旧花き科・野菜科を統合した花き野菜グループ、旧栽培環境科・病虫科からなる生産環境グループに加えて、旧技術普及部の研修・地域対応と旧総務部管理科機能を併せた技術研修グループの 3 グループ体制となった。令和 2 年度からは生産環境グループの名称が生産技術グループに変更された。

当センターは、花き・野菜に関する試験研究を行う専門場として、品種・栽培部門と栽培環境・病害虫の環境部門が一体化した総合的な試験研究を効率的に推進することが期待されている。

また、花き・野菜の試験研究の中核的機関として、農業研究本部、各場との連携の下に花き・野菜に関する試験研究の企画調整や地域対応研究も担っている。

(4) 研修体制および技術普及と推進方向

当センターにおける重要な業務として、試験研究とともに技術研修と技術普及がある。

技術研修は、試験研究で開発または体系化された新技術の生産現場への速やかで効率的な伝達普及を目的として、農業技術指導者、中核的農業者などを対象に実施している。長期的な専門研修から市民セミナーまで幅広い研修内容となっており、研究員と普及指導員、各農試の協力のほか、外部講師を招き指導している。研修事業に対応した研修寮、技術研修室、研修用ほ場・温室が整備されるとともに、研修担当者が配置され、平成 8 年度の準備期間を経て、平成 9 年度から本格的に研修事業を開始した。平成 12 年度に研修業務が総務部から新設の技術普

及部に移管し、さらに、平成 22 年度には研修事業と技術支援、旧管理科業務を担う技術研修グループが新設され、研究部にこれら業務が移管することとなった。

そのほか、当センターには開放実験室、展示温室、展示ほ場も設置され、農業関係者ばかりでなく、一般道民にも「開かれた試験場」として利用できる試験研究機関を目指している。

普及部門は、平成 8 年度より専門技術員室（滝川専技室）が設置され、普及支援活動や技術相談の機能を果たしてきたが、平成 12 年度に専門技術員と研究職員および研修担当者からなる技術普及部が新設され、普及・技術支援・研修に対応してきた。さらに、研究部と技術普及部で組織された技術体系化チームによる新技術の普及推進体制が整えられた。平成 18 年には農業改良助長法の改正により、専門技術員が普及指導員へ一元化されるとともに道立農試機構改正による技術普及部の体制も変更した。

また、平成 22 年度より、独法化による技術普及部の廃止にともない技術普及室が新設され、道所属の普及指導員が駐在して普及業務を担っている。

2. 位置および土壌

滝川市東滝川735番地

北緯43° 35′ 東経141° 59′

滝川市街より空知川に沿って東北に約8km、JR根室本線の旧東滝川駅より約1kmにある。当センターへのアクセスは、中央バス滝川ターミナルより赤平芦別方面行きバスに約13分間乗車し、花・野菜技術センター入口で下車、徒歩15分（約1km）であり、道央自動車道滝川インターチェンジより国道38号線を経由し車で5～6分である。

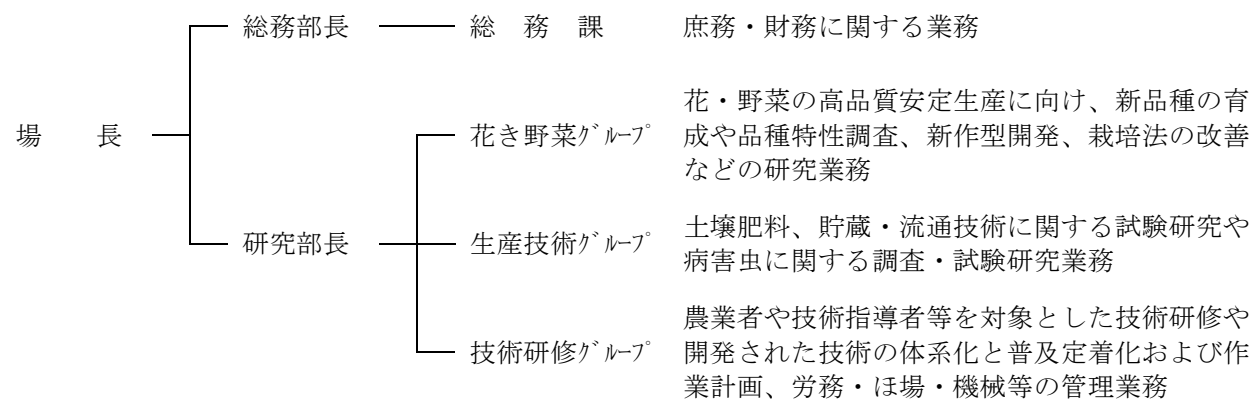
当センターは洪積台地（地形は低位段丘、平坦～緩傾斜）にあり、土壌の種類は細粒灰色台地土（暗色表層疑似グライ土）である。しかし、圃場整備により、作土層（40cm）は旧表土22cmに砂質軽石流堆積物を18cm客土、混和している。

ハウス圃場は酸性褐色森林土の客入土にバーク堆肥、土壌改良資材（炭カル）を投入し、改良した。平成9年、さらに砂質軽石流堆積物15cm程度を客土、混和した。

3. 用地および利用区分

総面積	51.8ha
建物敷地	19.2ha
庁舎	10.2ha
調査棟・温室	3.7ha
機械庫その他	5.3ha
畑	31.0ha
試験・展示・研修圃場	26.7ha
ハウス・枠圃場	4.3ha
道路用地	1.6ha

4. 機 構 （令和 8 年 3 月 31 日現在）



花・野菜技術センター技術普及室 普及センター等への支援、専門技術の調査研究

・北海道農政部生産振興局技術普課 上席普及指導員 主任普及指導員

・花・野菜技術センター研究部技術研修グループ 研究主幹 主査（技術研修）

5. 職 員

(1) 職員数 (令和8年3月31日現在)

区 分	場 長	部 長	総務課	花き野菜G	生産技術G	技術研修G	計
研 究 (7° 0' 0" -)	1	1		6	5	2	15
研究支援 (7° 0' 0" -)						4	4
研究支援 (道派遣)		1	4			2	7
計	1	2	(兼務1外)4	6	5	8	26

(2) 現職員名簿 (令和8年3月31日現在)

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名
総務部	場 長	鈴木 亮子	技術研修G	研究主幹	八木 亮治
	総務部長	四十坊 供之	"	主査(技術研修)	大宮 知
	総務課	四十坊 供之	"	主査(研修)	岡田 延邦
	"	主査(総務)	"	技師	堀川 愛花
	"	専門主任	"	専門主任	門田 修司
	"	主 事	"	"	北村 将吾
	"	技 師	"	主 任	井口 岳人
	研究部	研究部長	"	"	近嵐 勇
	花き野菜G	研究主幹			
	"	主任主査(花き)	技術普及室		
"	主任主査(野菜)	植野 玲一郎	北海道農政部		
"	主査(施設)	大久保進一	生産振興局	上席普及指導員	斯波 肇
"	主査(調整)	高濱 雅幹	技術普及課	主任普及指導員	後藤 昌人
"	研究職員	嶋倉 直也			
生産技術G	研究主幹	西脇 由恵			
	主査(栽培環境)	長田 亨			
	主任主査(病虫)	佐々木 純			
	研究職員	松岡 祐樹			
	研究職員	三原 州人			

(3) 転入・採用

職 名	氏 名	採用転入年月日	備考
総務部総務課 主査(総務)	平澤 尚江	7.4.1	道農政部農村設計課
研究部 研究部長	白井 康裕	7.4.1	法人本部研究推進部研究推進G
研究部花き野菜G 主査(野菜)	植野玲一郎	7.4.1	農業研究本部企画調整部
" 主査(調整)	高濱 雅幹	7.4.1	新規採用
" 研究職員	安田 優理	7.4.1	新規採用
研究部生産技術G 研究主幹	西脇 由恵	7.4.1	中央農試病虫部予察診断G
研究部技術研修G 技師	堀川 愛花	7.4.1	上川農業試験場総務課

(4) 転出・退職

職 名	氏 名	転出退職年月日	備考
総務部総務課 主査(総務)	齊藤 優子	7.3.31	上川総合振興局農務課
企画調整部 企画調整部長	黒島 学	7.3.31	農業研究本部企画調整部
研究部花き野菜G 研究職員	阿部 純也	7.3.31	十勝農業試験場研究部生産技術G
研究部生産技術G 研究主幹	小野寺鶴将	7.3.31	中央農業試験場病虫部病害虫G
" 研究主任	藤根 統	7.3.31	上川農業試験場研究部生産技術G
研究部技術研修G 主査(調整)	福川 英司	7.3.31	上川農業試験場研究部生産技術G
" 専門主任	北村 憲吾	7.3.31	留萌振興局農務課
" 主任(再)	北 和宏	7.3.31	退職
研究部花き野菜G 研究職員	安田 優理	7.8.31	退職

6. 収入支出決算額

(1) 収入決算額

(単位：円)

科 目	決 算 額
技術普及指導手数料	70,970
農産物売払収入	310,044
不要品売払収入	692,275
法人財産使用料等	374,063
その他雑収入	90
共同研究費負担金	2,750,000
国庫受託研究収入	3,050,000
道受託研究収入	3,073,643
その他受託研究収入	4,093,200
道補助金収入	1,000,000
計	15,141,285

※事業費支弁人件費振替額を含まない

(2) 支出決算額

(単位：円)

科 目	予算額	決算額	繰越額	残 額
重点研究費	0	0	0	0
職員研究奨励費	0	0	0	0
経常研究費	10,843,000	10,779,419	0	63,581
技術普及指導費	5,545,970	5,545,687	0	283
研究用備品整備費	385,000	385,000	0	0
維持管理経費（研究）	1,035,000	1,035,000	0	0
維持管理経費（一般）	77,217,000	73,046,332	0	4,170,668
運営経費	65,681,847	64,071,128	0	1,610,719
共同研究費	2,750,000	2,750,000	0	0
国庫受託研究費	2,794,363	2,794,363	0	0
道受託研究費	3,074,000	3,073,643	0	357
その他受託研究費	3,737,700	3,736,900	0	800
施設整備費補助金	48,620,000	48,620,000	0	0
施設整備費（繰越積立金）	0	0	0	0
その他補助金	1,000,000	1,000,000	0	0
計	222,683,880	216,873,472	0	5,846,408

※事業費支弁人件費振替額を除く

7. 建 物

(1) 現有（令和 8 年 3 月 31 日現在）

名 称	構 造	面積(㎡)	名 称	構 造	面積(㎡)
事務庁舎	レンガ造2階	449.86	研究庁舎	鉄筋コンクリート2階	2,104.73
総合研究庁舎	鉄筋コンクリート2階	721.36	展示温室	鉄骨平屋	118.87
農機具格納庫	木造平屋	233.00	研修宿泊棟	鉄筋コンクリート2階	1,205.84
総務課第2車庫	〃	43.74	参観者トイレ	鉄骨平屋	37.96
庁舎2号物置	〃	49.58	花き・野菜調査棟	鉄骨平屋	384.00
第2運動器具庫	〃	24.79	病虫・土壌作物調査棟	〃	390.00
運動具庫	〃	5.04	保鮮実験棟	〃	232.80
管理科油類格納庫	ブロック造平屋	5.69	花き・野菜詰所	〃	141.62
管理科職員詰所	木造平屋	106.92	床土置場・土詰播種作業棟	〃	553.80
機材庫	鉄骨平屋	1,033.46	農機具格納庫・車庫棟	〃	659.34
農業機械格納庫	〃	569.16	電気室棟	〃	66.30
総合車庫	〃	187.20	花き温室－1	〃	166.00
来園者トイレ	鉄筋コンクリート平屋	29.25	〃－2	〃	166.00
総務課倉庫	木造平屋	43.74	〃－3	〃	166.00
圃場避難棟－1	〃	29.16	野菜温室－1	〃	166.00
〃－2	〃	29.16	〃－2	〃	166.00
総務課物置3	木造平屋	26.46	〃－3	〃	166.00
〃4	〃	26.46	病虫温室	〃	166.00
〃5	〃	14.87	土肥温室	〃	166.00
第2研修寮	ブロック造平屋	122.50	研修温室－1	〃	290.25
第2研修寮物置	木造平屋	9.93	〃－2	〃	290.25
第2堆肥舎	鉄筋コンクリート平屋	128.00	環境制御温室－1	〃	166.00
			〃－2	〃	166.00
			人工気象室	〃	80.18
			ミスト室	〃	164.20

8. 施設および備品

(1) 新たに設置した施設

名 称	構造	数量	新設年月日	価 格	摘 要
な し					

(2) 新たに購入した備品（50 万円以上）

品 名	数量	規格および型式	金 額	配 置
ラボ用オートクレーブ	1台	LPS-500	835,560円	生産技術G
管理機	1台	TA951N-W	737,000円	技術研修G
蒸留水製造装置	1式	RFS533PC	1,474,000円	生産技術G
大型送風定温乾燥機	1台	DRLE23WB	2,728,000円	花き野菜G
ガスレンジ	1式	TSGR-1222	528,000円	総務課
中央監視システム（試験ほ場）	1式		15,180,000円	総務課
中央監視システム（研究庁舎棟）	1式		33,440,000円	総務課

Ⅱ 作 況

1. 気象概要

(1) 冬期間の経過

冬期間（11月～3月）の平均気温は、12月中下旬で平年より低かった一方、1月中旬から2月下旬にかけて高かった。降水量は11月で多く、12月に少なくなり、再び1月に多くなった。日照時間は12月下旬、1月下旬、2月下旬、3月上旬で多く、それ以外の時期では平年並みであった。

(2) 農耕期間の経過

農耕期間（5月から9月）の平均気温は、平年並みまたは平年より高めに推移した。特に6月中旬、6月下旬、7月上旬および7月下旬は、平年より3℃以上高かった。農耕期間の積算気温は3,080℃で平年の111%であった。

降水量は5月と7月に少なく、農耕期間を通しての積算降水量は552 mmで平年の97%であり、平年並みであった。

日照時間は5月から7月にかけて多かった。農耕期間を通しての積算日照時間は938時間であり平年の105%であった。

本年の農耕期間の気象は、平年より平均気温が高く、降水量は平年並み、日照時間は平年よりやや多かった。

(3) 月別の経過

4月：平均気温は平年並みから平年より高めで推移したが、下旬に平年より低下した。上旬の降水量が少なかった一方、中旬以降の降水量は平年に比べて多かった。日照時間は、概ね平年より少なかった。

5月：平均気温は、上旬で平年並みであったが、中旬で高くなり、下旬で低くなった。降水量は平年より少なかった。上中旬の日照時間は平年並みに推移したが、下旬の日照時間が平年より11時間ほど多かった。

6月：平均気温は上旬が平年並みであったが、中～下旬は高かった。降水量は中旬で少なかった。日照時間は中下旬で多かった。

7月：平均気温は高めに推移した。中旬の降水量が少なかった一方、上旬と下旬の降水量は平年より多かった。日照時間は上旬で多かった。

8月：平均気温は平年に比べ高く推移した。降水量は上旬で少なく、中下旬に多かった。日照時間は中旬に多く、下旬に少なかった。

9月：平均気温は平年に比べ高く推移した。中旬および下旬の降水量は多かったが、日照時間も多かった。

10月：平均気温は平年並みに推移したが、下旬に平年より低くなった。降水量は上旬および中旬で少なかった。日照時間は上旬で多かったものの、中旬および下旬で少なかった。

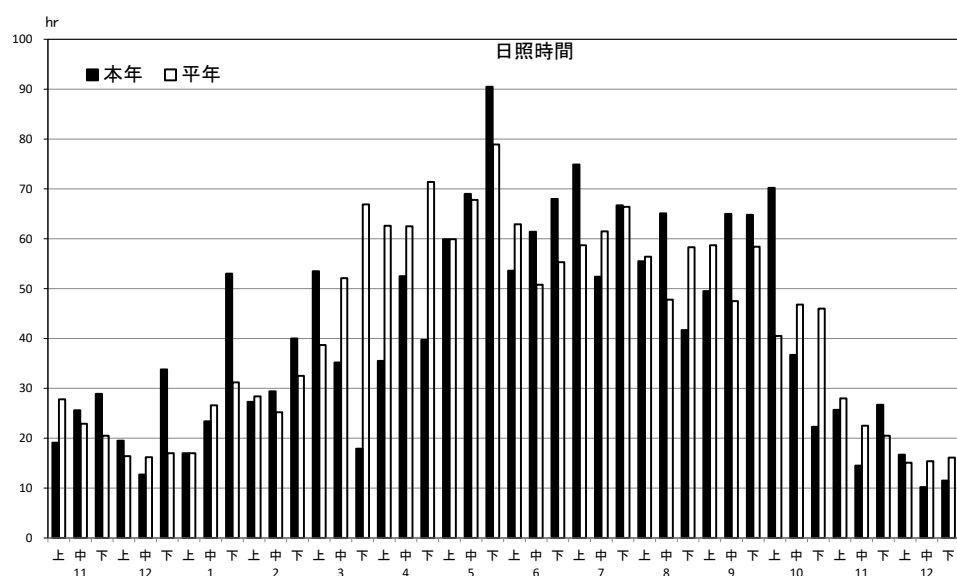
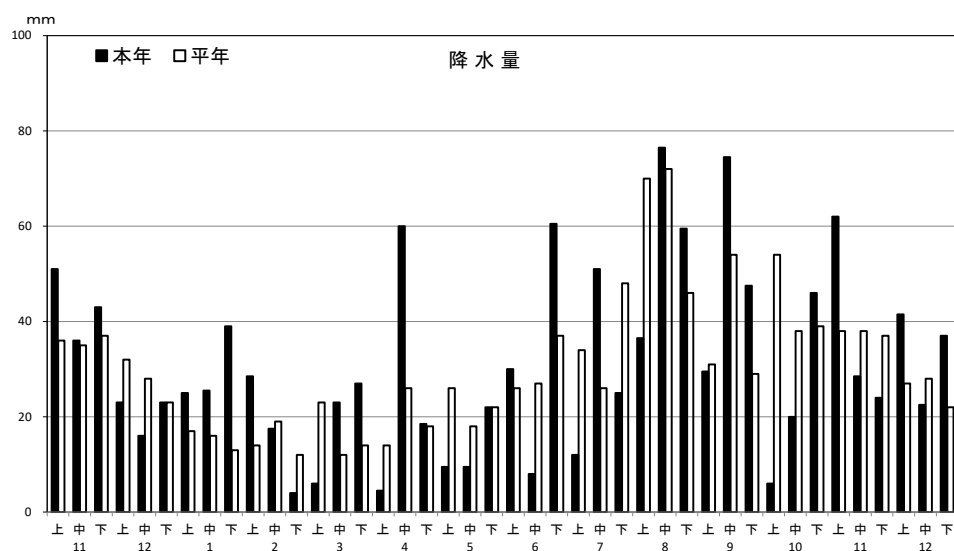
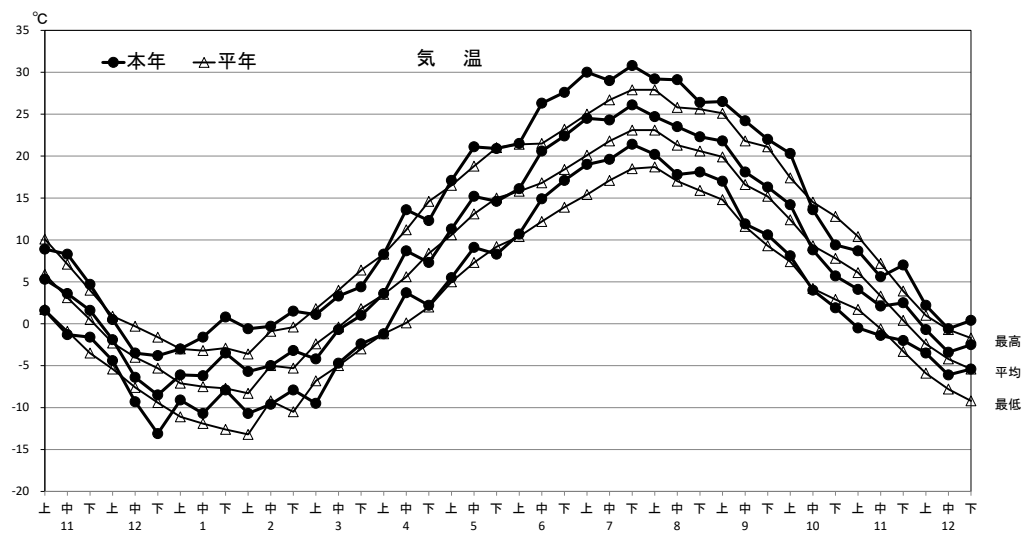
2. 野菜類の生育状況

(1) いちご（対象品種：「けんたろう」）

令和6年8月26日定植の半促成（土耕）作型で栽培した。定植前後の8月下旬から10月下旬の平均気温は、9月下旬を除き、平年に比べて0.6～2.7℃高く推移した。

ハウス天井フィルムを令和7年2月20日に被覆し、3月17日に融雪となった。3月29日から5月2日までの期間、トンネル保温した。3月中旬から4月上旬の気温は平年並みまたはやや低く推移し、開花始めは4月17日となった。4月中旬から5月中旬までの気温は、4月下旬を除き、平年より高く推移したため、収穫始期は5月15日で平年よりやや早かった。

5月下旬から6月下旬の日照時間は平年並みであったが、6月中下旬の気温が平年より約4℃高かった。規格内収穫果数は155千個/10a、平均一果重は11.8gで、平年より約15%低下した。このため、規格内収量は1832kg/10a、総収量も2519kg/10aとなり、平年より少なかった。Brix(屈折計示度)は9.6%で平年並みであった。



滝川気象図（令和6年11月～令和7年12月）

気象表（令和6年11月～令和7年12月）

年	月	旬	平均気温（℃）			最高气温（℃）			最低气温（℃）			降水量（mm）			降水日数（日）			日照時間（時間）		
			本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
R6	11	上	5.3	5.9	△ 0.6	8.9	10.1	△ 1.2	1.6	1.7	△ 0.1	51	36	15	6	5	1	19.1	27.8	△ 8.7
		中	3.6	3.1	0.5	8.3	7.1	1.2	-1.3	-0.9	△ 0.4	36	35	1	8	6	2	25.6	22.9	2.7
		下	1.6	0.5	1.1	4.7	4.0	0.7	-1.6	-3.5	1.9	43	37	6	8	7	1	28.9	20.5	8.4
	12	上	-1.9	-2.3	0.4	0.5	0.9	△ 0.4	-4.4	-5.4	1.0	23	32	△ 9	9	7	2	19.5	16.4	3.1
		中	-6.4	-4.0	△ 2.4	-3.5	-0.3	△ 3.2	-9.3	-7.6	△ 1.7	16	28	△ 12	10	7	3	12.7	16.2	△ 3.5
		下	-8.5	-5.3	△ 3.2	-3.8	-1.6	△ 2.2	-13.1	-9.4	△ 3.7	23	23	0	7	7	0	33.8	17.0	16.8
R7	1	上	-6.1	-7.1	1.0	-3.0	-3.0	0.0	-9.1	-11.1	2.0	25	17	8	7	6	1	17.0	17.0	0.0
		中	-6.2	-7.5	1.3	-1.6	-3.2	1.6	-10.7	-11.9	1.2	26	16	10	7	4	3	23.4	26.6	△ 3.2
		下	-3.5	-7.7	4.2	0.8	-2.9	3.7	-7.9	-12.6	4.7	39	13	26	3	6	△ 3	53.0	31.2	21.8
	2	上	-5.7	-8.3	2.6	-0.6	-3.6	3.0	-10.7	-13.2	2.5	29	14	15	4	6	△ 2	27.3	28.4	△ 1.1
		中	-5.0	-5.0	0.0	-0.3	-0.9	0.6	-9.6	-9.2	△ 0.4	18	19	△ 2	8	6	2	29.4	25.2	4.2
		下	-3.2	-5.3	2.1	1.5	-0.4	1.9	-7.9	-10.5	2.6	4	12	△ 8	2	5	△ 3	40.0	32.5	7.5
	3	上	-4.2	-2.4	△ 1.8	1.1	1.8	△ 0.7	-9.5	-6.8	△ 2.7	6	23	△ 17	4	5	△ 1	53.5	38.7	14.8
		中	-0.7	-0.4	△ 0.3	3.3	4.0	△ 0.7	-4.7	-5.0	0.3	23	12	11	4	3	1	35.2	52.1	△ 16.9
		下	1.0	1.8	△ 0.8	4.4	6.4	△ 2.0	-2.4	-3.0	0.6	27	14	13	9	4	5	17.9	66.9	△ 49.0
	4	上	3.6	3.5	0.1	8.3	8.3	0.0	-1.2	-1.2	0.0	5	14	△ 10	5	4	1	35.5	62.6	△ 27.1
		中	8.7	5.6	3.1	13.6	11.2	2.4	3.7	0.1	3.6	60	26	34	7	3	4	52.5	62.5	△ 10.0
		下	7.3	8.4	△ 1.1	12.3	14.6	△ 2.3	2.2	2.0	0.2	19	18	1	7	3	4	39.7	71.4	△ 31.7
	5	上	11.3	10.6	0.7	17.1	16.5	0.6	5.5	5.0	0.5	10	26	△ 17	4	4	0	59.9	59.9	0.0
		中	15.2	13.1	2.1	21.1	18.8	2.3	9.1	7.3	1.8	10	18	△ 9	4	3	1	69.0	67.8	1.2
		下	14.6	15.0	△ 0.4	20.9	21.0	△ 0.1	8.3	9.2	△ 0.9	22	22	0	2	4	△ 2	90.5	78.9	11.6
	6	上	16.1	15.8	0.3	21.5	21.4	0.1	10.7	10.4	0.3	30	26	4	3	4	△ 1	53.6	62.9	△ 9.3
		中	20.6	16.8	3.8	26.3	21.5	4.8	14.9	12.2	2.7	8	27	△ 19	3	4	△ 1	61.4	50.8	10.6
		下	22.4	18.4	4.0	27.6	23.2	4.4	17.1	13.9	3.2	61	37	24	3	3	0	68.0	55.3	12.7
	7	上	24.5	20.1	4.4	30.0	25.0	5.0	19.0	15.4	3.6	12	34	△ 22	2	3	△ 1	74.9	58.7	16.2
		中	24.3	21.8	2.5	29.0	26.7	2.3	19.6	17.1	2.5	51	26	25	4	3	1	52.4	61.5	△ 9.1
		下	26.1	23.1	3.0	30.8	27.9	2.9	21.4	18.5	2.9	25	48	△ 23	4	3	1	66.7	66.4	0.3
	8	上	24.7	23.1	1.6	29.2	27.9	1.3	20.2	18.7	1.5	37	70	△ 34	5	4	1	55.5	56.4	△ 0.9
		中	23.5	21.3	2.2	29.1	25.8	3.3	17.8	17.0	0.8	77	72	5	3	4	△ 1	65.1	47.8	17.3
		下	22.3	20.6	1.7	26.4	25.6	0.8	18.1	15.9	2.2	60	46	14	6	5	1	41.7	58.3	△ 16.6
	9	上	21.8	19.9	1.9	26.5	25.1	1.4	17.0	14.8	2.2	30	31	△ 2	4	3	1	49.5	58.7	△ 9.2
		中	18.1	16.6	1.5	24.2	21.8	2.4	11.9	11.6	0.3	75	54	21	4	4	0	65.0	47.5	17.5
		下	16.3	15.2	1.1	22.0	21.1	0.9	10.6	9.3	1.3	48	29	19	2	4	△ 2	64.8	58.4	6.4
10	上	14.2	12.4	1.8	20.3	17.4	2.9	8.1	7.4	0.7	6	54	△ 48	2	6	△ 4	70.2	40.5	29.7	
	中	8.8	9.3	△ 0.5	13.6	14.5	△ 0.9	4.0	4.2	△ 0.2	20	38	△ 18	6	6	0	36.7	46.8	△ 10.1	
	下	5.7	7.8	△ 2.1	9.4	12.8	△ 3.4	1.9	2.9	△ 1.0	46	39	7	9	5	4	22.3	46.0	△ 23.7	
11	上	4.1	6.1	△ 2.0	8.7	10.4	△ 1.7	-0.5	1.7	△ 2.2	62	38	24	7	5	2	25.7	28.0	△ 2.3	
	中	2.1	3.3	△ 1.2	5.6	7.2	△ 1.6	-1.4	-0.6	△ 0.8	29	38	△ 10	6	6	0	14.5	22.5	△ 8.0	
	下	2.5	0.4	2.1	7.0	3.9	3.1	-2.0	-3.3	1.3	24	37	△ 13	4	7	△ 3	26.7	20.5	6.2	
12	上	-0.7	-2.4	1.7	2.2	1.0	1.2	-3.5	-5.9	2.4	42	27	15	9	7	2	16.7	15.1	1.6	
	中	-3.4	-4.2	0.8	-0.6	-0.7	0.1	-6.1	-7.8	1.7	23	28	△ 6	8	7	1	10.2	15.4	△ 5.2	
	下	-2.5	-5.4	2.9	0.4	-1.7	2.1	-5.4	-9.2	3.8	37	22	15	9	7	2	11.5	16.1	△ 4.6	
5～9月積算			3080.4	2772.9	307.5	3895.7	3564.1	331.6	2256.9	2006.4	250.5	552	566	△ 15	53	55	△ 2	938.0	889.3	48.7
平年比(%)			111.1			109.3			112.5			97.4			96.4			105.5		

注1 滝川地域気象観測所のAMeDAS観測値。

注2 日照時間は太陽電池式（新型）による。

注3 平年値は前10カ年の平均値。

注4 △印は減を示す。

Ⅲ 事業の推進方向と成果の概要

1. 研究部

(1) 花き野菜グループに関する試験

収益性の高い園芸作物の高品質・安定生産に向け、花きでは、安定生産や計画出荷に向けた試験、野菜では、いちごの品種改良と、にんにく、ブロッコリーなど露地野菜や施設野菜であるトマトの栽培技術改善のための試験を実施している。花き、野菜に共通して施設栽培の環境制御にかかる試験を実施している。また、技術研修Gの研修事業を支援している。

①「長期どり可能な春どりいちご系統の品種化」では、長期どりが可能な春どり栽培向けいちご多収品種を開発することを目標に各種検定試験を実施し、「空知40号」および「空知41号」を継続検討とした。

②「低コストかつ効率的な土壌消毒を前提とした施設トマト栽培技術の開発」では、側面根域制限栽培によるトマト栽培での収量性、品質、養分吸収量を明らかにした。

③「ブロッコリーの夏季安定出荷技術の開発」では、晩春まき（8月どり）作型において高温による生理障害の発生を半減させる安定生産技術を開発するため、高温障害発生条件を解明に向けて成長点の検鏡により花芽分化ステージの推移を明らかにするとともに、現地における栽培実態を調査し、高温障害への関与が考えられる栽培要素を抽出した。

④「水稲複合経営におけるにんにく安定生産技術の確立」では、水稲との複合経営においてLサイズ（球重60g以上）のにんにくを安定的に生産する栽培法を確立するため、植え付け時期等が越冬前後の生育や収量に及ぼす影響、マルチ色や植え付け深度が生育、収量等に及ぼす影響を明らかにした。

⑤「農業副産物を活用した高機能バイオ炭の製造・施用体系の確立 2. 高機能バイオ炭等によるCO2固定効果の実証・評価等」では、高機能バイオ炭を施用した農地炭素貯留に向け、もみ殻燐炭施用がキャベツの生育および収量に及ぼす影響を明らかにした。

⑥「AI 農業社会実装プロジェクト 1. 自然環境下での葉菜類の生育収量シミュレータの開発」では、葉菜類生育収量シミュレータの基本 AI モデル開

発に資するため、北海道におけるキャベツ作での生育および環境データを取得した。

⑦「干ばつ時における不活着等の被害に対応できる露地園芸作物の育苗・定植技術の開発」では、ブロッコリーおよびレタスについて、温室内での小規模試験により、育苗期における各種生分解性吸水性ポリマー・バイオスティミュラント資材の施用が、乾燥条件での作物の萎れや給水後の回復に及ぼす影響を評価した。

⑧「有効積算気温に基づいた発育速度モデルを適用したユリ類収穫予測シミュレーションと能動的な温度制御による収穫時期調節の実証」では、収穫予測シミュレーションの作成に資するため、場内における3作期および主産地における1作期で、オリエンタル系ゆり栽培条件、生育期節、切り花品質、発育速度、日平均気温等を明らかにした。

⑨「高温期の作型におけるにんじん、だいこんの品種特性調査」では、晩春まき（5月播種－9月収穫）および初夏まき（6月播種－10月収穫）作型において、「天翔五寸」を標準品種とし、主に収穫適期幅に着目して11品種の特性を明らかにした。

⑩「農業資材試験」では、たまねぎに対する除草剤1剤の適用性を検討した。

(2) 生産技術グループに関する試験

生産技術グループは、花き・野菜の肥培管理、や貯蔵・流通等の栽培環境に関する試験および病害虫に関する試験を実施している。また、技術研修グループで実施する地域支援課題や技術研修を分担するとともに、生産現場で発生した病害虫および生理障害の診断を実施している。

1) 栽培環境に関する試験

①「花ゆりの栄養障害簡易診断手法の開発」では、土壌中の微量元素の欠乏あるいは過剰症の症状を養液栽培により再現し、それらの特徴を整理した。また、これら症状の画像を取得し学習させたAIによる画像分類モデルを試作し、その正答率は66.8%となり画像の有効性を確認し、令和7年農業試験会議に提案し指導参考事項となった。

②「農業副産物を活用した高機能バイオ炭の製造・施用体系の確立 2. イネ粃から高機能バイオ炭の開発 ③高機能バイオ炭施用の効果現地実証試験」では、もみ殻炭の施用(連用3年目)の有無により、キャベツの生育および収量への影響は認められなかった。施用による土壌物理性への影響は判然としなかったが、施用量が多くなるほど、炭素貯留量は増加した。

③「アダプティブ MAP システムを用いたブロッコリーの高鮮度流通に関する研究」では、ブロッコリー、アスパラガス、スイートコーンを対象に蔵置試験(5℃～15℃)を行い、鮮度保持効果を検討した。ブロッコリーでは貯蔵温度 10℃、15℃の高酸素濃度条件下では腐敗、変色が認められた。冷蔵トラックによるブロッコリーの実輸送試験では、アダプティブ MAP の鮮度保持効果と輸送後の食味は氷詰め発泡スチロール箱とほぼ同等であった。

④「北海道のにんじん栽培におけるプラスチックを用いない緩効性肥料の施用技術の実証」では、場内露地圃場および現地生産圃場において各種化学合成緩行性肥料の施用試験を実施した。規格内収量について、HCDU 短-30%および 50%区では対照区、参考区と概ね同等、UF2-30%および 50%区では対照区、参考区を上回ったことから、プラスチック被覆肥料を用いた施肥法の代替が可能と判断し、令和7年度北海道農業試験会議に提案、指導参考事項となった。

⑤「にんにくのマルチング栽培におけるプラスチック被覆肥料を用いない施肥技術の開発」では、場内圃場においてプラスチックを用いない被覆肥料の施用効果を調査し、プラスチック被覆緩効性肥料に対する代替可能性を検討した。プラスチック被覆肥料(J コート L70)区と化学合成緩効性肥料(ハイパーCDU 中期)区の栽培期間中の葉数、草丈はほぼ同程度であり、規格内収量や規格内率、窒素吸収量には有意な差は認められなかった。

⑥「肥料価格高騰と養分収支を考慮した直播てんさいとたまねぎに対する適正施肥量の確立」では、場内露地圃場および現地生産圃場において、移植たまねぎのリン酸施肥用量試験を実施した。移植たまねぎでは、土壌診断評価区分「やや低い」以上の圃場において、収量性および収益性を維持しつつリン酸施肥量を現行基準の5割にすることが可能で、これ

によりリン酸収支も改善することを明らかにし、和7年農業試験会議に提案し指導参考事項となった。

⑦「低コストかつ効率的な土壌消毒を前提とした施設トマト栽培技術の開発」では、前年秋消毒ハウスにおいて栽培前の土壌理化学性調査、および栽培期間中のトマトの経時的な栄養診断および作物の養分吸収量を調査した。側面制限養液土耕区では7月中旬に土壌塩基バランス不良が原因の苦土欠乏由来と思われる第4果房上の茎葉の黄化症状を生じたが、良果収量は慣行栽培と同程度であった。

⑧「ブロッコリーの夏季安定出荷技術の開発」では、MA 包装を用いた7月どりブロッコリーの貯蔵試験を実施し、貯蔵前条件および貯蔵条件が花蕾品質に与える影響を調査した。貯蔵1か月後の花蕾品質は低温ほど優れ、2℃ではカビの発生率は0～23%の範囲であり、8℃では全ての花蕾が商品性を失い、予冷の遅れや有無、荷重による花蕾品質への影響は判然としなかった。

⑨「農業農村整備事業等に係る土壌調査」では、2地区の現地調査、土壌理化学性分析を実施した。土地改良事業(作物増収効果の実証試験)では、場内圃場に排水性改良3処理について施工した。

⑩「化学合成糊剤不使用のたまねぎ育苗培土製品化試験」では、場内および現地において試作培土および市販の糊剤入りの培土にたまねぎを播種し、育苗期間中の経時的な生育を調査した。

⑪「農業資材試験」では、たまねぎに対する液状肥料「ラッカイン Zn」について、生育、収量、養分吸収量に及ぼす影響を調査した。倒伏期における資材区の亜鉛濃度は、対照区よりも高いことが確認されたが、規格内収量には有意差は認められなかった。

⑫「生理障害診断試験」では4件の診断依頼に対応した。

2) 病害虫に関する試験

①「水稻複合経営におけるにんにく安定生産技術の確立」では、播種日が早いほど越冬前のさび病発生が多かったが、融雪後のさび病発生も早まった。また、4月末～5月始に病勢進展の停滞期が認められ、4月中の発病は越冬前の感染によるもの、5月以降の発病は越冬病斑からの二次感染によるものと推測された。現地ほ場における発生は、防除開始が5月中旬と遅くなった圃場以外は、防除が徹底されたことから発生は少なかった。

②「長期どり可能な春どりいちご系統の品種化」では、「空知 40 号」、「空知 41 号」に対する特性検定を行い、疫病抵抗性については基準品種「きたえくぼ」の発病度が 36.1 と低く、他の基準品種や検定品種では発病が認められず、抵抗性を判定できなかった。萎黄病抵抗性については、「空知 40 号」の抵抗性は「強」、「空知 41 号」は「やや弱」と判定した。

③「農業資材試験」では、殺菌剤 4 点についてその効果を調査した。有効性が認められた殺菌剤 2 点が指導参考事項となった。

④「病害虫発生予察調査」では、ねぎのべと病とさび病について、時期ごとの発生量などを調査した。

⑤「農作物病害虫診断試験」では、20 件の診断依頼に対応した。

(3) 技術研修グループに関する試験

技術研修グループは、地域農業技術支援会議に集められたニーズなど、現地実証が必要な課題について支援を行うとともに、これまでの成果を普及するために現地実証試験等を行っている。

1) 革新的技術導入による地域支援

「赤色 LED 照明技術を用いた秋切りトルコギキョウの省力・品質向上の現地実証」では、中晩生 3 品種を供試して現地実証試験を実施した。赤色 LED 区では全ての品種で茎長と節数が増加し、切り花品質が向上した。切り花長 70～80 cm で分枝 3～4 本以上の上位規格採花割合は 10～25% 増加することを実証した。

2. 技術普及室

(1) 推進方向

技術普及室は、地域の試験研究に対する要望を的確に把握し、実用的な技術開発を行うとともに、その迅速な普及・定着を普及組織と一体的に推進するために、地域農業の支援（地域農業技術支援会議）、農業改良普及センターへの技術支援を柱として、花き・野菜研修事業および農業大学校、普及指導員の研修事業の支援も含めて研究部門、農業改良普及センター、振興局および関係する機関団体と連携を図り活動を展開した。

(2) 成果の概要

1) 地域農業技術支援会議への支援

空知総合振興局の地域農業技術支援会議構成員として参画し、農業研究本部技術普及室・普及センター・振興局と連携し専門場の研究および普及の立場から、花きと野菜に関する課題整理や解決方を積極的に支援した。三者会議・関係者会議の他、現地要望課題の聞き取り調査などに参画した。

2) 農業改良普及センター支援と普及指導員研修

普及センターからの支援要請について、専門項目に関する支援要請活動計画に基づき支援した。

また、普及センターが取り組む普及活動に関する支援要請（重点普及課題、普及課題等）についても、管轄農試技術普及室と連携し積極的に技術支援を行った。

さらに、気象災害や突発的な病害虫の発生に対して、技術普及課および各技術普及室と連携を取りながら迅速に対応した。

普及指導員研修については、花・野菜技術センターで実施している道段階研修の新任者早期養成研修（Ⅱ）、専門技術研修（花き・野菜）、高度専門技術研修（花き・野菜）について技術普及室のほか花き野菜グループ、生産技術グループ、技術研修グループからの講義・実習等の協力も得て実施し、振興局段階や職場段階での研修についても積極的に支援した。

普及指導員普及奨励等新技術研修について、道央 5（総合）振興局（野菜 1 課題、花き 2 課題、対象普及指導員 72 名）、道北 3（総合）振興局（花き 2 課題、対象普及指導員 42 名）、オホーツク総合振興局（花き 2 課題、対象普及指導員 15 名）、十勝総合振興局（花き 1 課題、対象普及指導員 33 名）WEB により普及推進および指導参考事項を伝達した。

3) 研修事業への支援

花き・野菜技術研修事業における、講義・実習および運営等に関する支援を実施した。

関係団体等の研修として、ホクレン主催による担い手向け Web 研修会（きゅうり）の講師対応を行った。

4) その他

営農技術対策の提供や各種事業への助言など、農業者組織や関係機関・各種団体からの要請への支援等を行った。

Ⅳ 試験研究および地域支援等活動の課題名

1. 花き野菜に関する試験

(1) 長期どり可能な春どりいちご系統の品種化

試験期間：令和6～8年

担当 G：花き野菜G、生産技術G、上川農試、道南農試

目的：これまでに育成した有望系統を活用し、長期どりが可能な春どり栽培向けいちご多収品種（収量を50%向上、2t/10a→長期どりで3t/10a）を開発する。

(2) 低コストかつ効率的な土壌消毒を前提とした施設トマト栽培技術の開発

試験期間：令和6～8年

担当 G：花き野菜G、生産技術G、中央農試

目的：高い土壌消毒効果を発揮する側面根域制限栽培を開発する。その環境において従来の栽培技術、施肥管理が収量性や品質に影響するか検証、慣行栽培に比較し劣る点が認められた場合は改善策を示す。

(3) ブロッコリーの夏季安定出荷技術の開発

試験期間：令和7～9年

担当 G：花き野菜G、生産技術G

目的：障害発生条件を解明し、花蕾品質向上のための灌水法を組み込んだ晩春まき（8月どり）作型において高温による生理障害の発生を半減させる安定生産技術を開発する。また、鮮度保持資材を活用して生産ピークとなる春まき（7月どり）作型における1ヶ月程度の出荷時期調整技術を開発する。

(4) 水稲複合経営におけるにんにく安定生産技術の確立

試験期間：令和6～8年

担当 G：花き野菜G、生産技術G

目的：水稲との複合経営において、Lサイズ（球重60g以上）のにんにくを安定的に生産する栽培法を確立する。

(5) 農業副産物を活用した高機能バイオ炭の製造・施用体系の確立 2. 高機能バイオ炭等によるCO2固定効果の実証・評価等

試験期間：令和5～9年

担当 G：花き野菜G、生産技術G、中央農試

目的：未利用資源である籾殻から製造するバイオ炭の土壌物理性改善効果や炭素貯留特性を明らかにし、さらに有用微生物を付加した高機能バイオ炭について、たまねぎおよびキャベツ栽培において農研機構（北農研センター、野菜花き研究部門）の開発する利用法の実証を行う。

(6) AI 農業社会実装プロジェクト（1. 自然環境下での葉菜類の生育収量シミュレータの開発）

試験期間：令和5～7年

担当 G：花き野菜G、中央農試

目的：葉菜類生育収量シミュレータの基本AIモデル開発に資する、北海道におけるキャベツ作での生育および環境データを取得する。

(7) 干ばつ時における不活着等の被害に対応できる露地園芸作物の育苗・定植技術の開発

試験期間：令和7～11年

担当 G：花き野菜G、道南農試

目的：ブロッコリー、レタスおよび長ねぎを対象として、生分解性吸水性ポリマーおよびバイオスティミュラントなどの環境配慮資材の、育苗・定植時施用での高温・干ばつ被害に対する有効性を明らかにし、灌漑設備のない露地圃場に導入可能な育苗・定植技術を開発・実証する。

(8) 有効積算気温に基づいた発育速度モデルを適用したユリ類収穫予測シミュレーションと能動的な温度制御による収穫時期調節の実証

試験期間：令和7年

担当 G：花き野菜G

目的：オリエンタル系ゆりの冷凍貯蔵球利用5～8月植え抑制9～11月切り作型において、場内3作期、現地1作期の栽培条件、生育期節を他共同研究機関と共通の品種、計測機器により明らかにする。

(9) 高温期の作型におけるにんじん、だいこんの品種特性調査

試験期間：令和7～8年

担当 G：花き野菜G、十勝農試

目的：青果用にんじんについて主に収穫適期幅、加工および青果用だいこんについて主に軟腐病や生

理障害の発生に着目して、高温期の作型における品種特性を明らかにする。

(10) 農業資材試験

試験期間：昭和 40 年～

担 当 G：花き野菜G（各農試と分担）

目 的：野菜に対する除草剤、生育調節剤の実用性を検討する。

2. 栽培環境に関する試験

(1) 花ゆりの栄養障害簡易診断手法の開発の開発

試験期間：令和 5 年～7 年

担 当 G：生産技術G

目 的：生産現場における花ゆりの栄養障害の簡易・迅速な診断および初動調査に資するため、微量要素の欠乏・過剰症の症状を体系的に整理したビジュアル資料を作成するとともに、AI による栄養障害の画像分類手法を開発する。

(2) 農業副産物を活用した高機能バイオ炭の製造・施用体系の確立 2. イネ粃がら高機能バイオ炭の開発 ③高機能バイオ炭施用の効果現地実証試験

試験期間：令和 5～9 年

担 当 G：生産技術G、花き野菜G、中央農試生産技術G、環境保全G

目 的：イネもみがら等の農業副産物を活用した効率的なバイオ炭製造技術を開発し、有用微生物を添加した「高機能バイオ炭」の開発をめざす。また、全国各地の様々な農作物種を対象に、単収向上効果等の効果検証を行い、高機能バイオ炭を施用した農地炭素貯留を全国的に推進できる技術基盤を確立する。さらに、農地炭素貯留された CO₂ 量等を環境価値に変換する評価手法および Web 上からの自動評価システムを開発することにより、生産された農産物の環境価値を消費者等に価格転嫁できる情報基盤を確立することを目指す。

(3) アダプティブ MAP システムを用いたブロッコリーの高鮮度流通に関する研究

試験期間：令和 5～7 年

担 当 G：生産技術G、上川農試生産技術G

目 的：青果物用鮮度保持技術「アダプティブ MAP システム」について、道産ブロッコリーの国内流通における鮮度保持効果、利用条件および導入効果を明らかにする。

(4) 北海道のにんじん栽培におけるプラスチックを用いない緩効性肥料の施用技術の実証

試験期間：令和 6 年～7 年

担 当 G：生産技術G

目 的：低脱プラスチックの動向に対応したにんじんの安定生産のために、プラスチックを用いない化学合成緩効性肥料の施用効果を現地圃場で確認し、代替可能性を実証する。

(5) にんにくのマルチング栽培におけるプラスチック被覆肥料を用いない施肥技術の開発

試験期間：令和 7 年～8 年

担 当 G：生産技術G

目 的：にんにくのマルチング栽培において、プラスチック被覆を用いない緩効性肥料の施用効果およびプラスチック被覆緩効性肥料に対する置き換え可能性を明らかにする。

(6) 肥料価格高騰と養分収支を考慮した直播てんさいとたまねぎに対する適正施肥量の確立

試験期間：令和 6 年～7 年

担 当 G：生産技術G、十勝農試生産技術G、北見農試生産技術G

目 的：リン酸・カリの施肥量が比較的多い 2 品目を対象に肥料価格高騰を考慮し、養分収支に見合ったリン酸・カリの適正施肥量を確立する。

(7) 低コストかつ効率的な土壌消毒を前提とした施設トマト栽培技術の開発

試験期間：令和 6 年～8 年

担 当 G：生産技術G、花き野菜G、中央農試病害虫G

目 的：高い土壌消毒効果を発揮する側面根域制限栽培を開発する。その環境下で従来の栽培技術、施肥管理の収量性・品質に与える影響を検証し、改善策を示す。

(8) ブロッコリーの夏季安定出荷技術の開発

試験期間：令和 7 年～9 年

担 当 G：生産技術G、花き野菜G

目 的：鮮度保持資材を活用して生産ピークとなる春まき（7 月どり）作型における 1 ヶ月程度の出荷時期調整技術を開発する。

(9) 道営農業農村整備事業等に係る土壌調査

試験期間：昭和 40 年～

担 当 G：生産技術G（各農試と分担）

目 的：道営農業農村整備事業における水田、畑地、草地の土地改良事業の計画地区での適切な土地改良方策を実施するために指針を示す。また、事業実施後の作物増収効果を明らかにする。

(10) 化学合成糊剤不使用のたまねぎ育苗培土製品化試験

試験期間：令和 7～8 年

担 当 G：生産技術G

目 的：試作培土について対照培土と同等の苗生育および機械移植精度であることを調査し、道内の生産現場における実用性を明らかにし資材の製品化に資する。

(11) たまねぎに対する液状肥料「ラッカイン Zn」の施用効果

試験期間：令和 7 年

担 当 G：生産技術G

目 的：たまねぎの生育、収量に対する液状肥料「ラッカイン Zn」の施用効果を明らかにする。

**(12) 農作物病虫害生理障害診断・緊急対策試験
②生理障害の診断**

試験期間：令和 2～6 年

担 当 G：生産技術G（各農試と分担）

目 的：農業改良普及センター、農政部普及指導員等を通じて当场に診断依頼される農作物の栄養・生理障害を診断し、被害軽減のための適切な対策を示す。

3. 病虫害に関する試験

(1) 水稲複合経営におけるにんにく安定生産技術の確立

試験期間：令和 6～8 年

担 当 G：生産技術G

目 的：播種時期や種球の調整方法、マルチ色と植付深度、さび病の防除対策を検討し、それらを組合せた現地実証試験を実施する。これにより、L サイズ（球重 60g 以上）のにんにくを安定的に生産する栽培法を確立する。

(2) 長期どり可能な春どりいちご系統の品種化

試験期間：令和 6～8 年

担 当 G：花き野菜G、生産技術G

目 的：長期どり可能な春どり栽培向けいちご多収品種の育種に係る、選抜系統の疫病・萎黄病の特性検定（病害抵抗性）を実施する。

(3) 農作物病虫害生理障害診断・緊急対策試験

①病虫害および生理障害の診断

試験期間：令和 7～11 年

担 当 G：生産技術G（各農試と分担）

目 的：突発的に発生する病虫害による被害を防止するため、それらの診断を行うと共に、道内で新たに発生した病虫害の情報を記録し、蓄積する。

(4) 農業資材試験 殺菌・殺虫剤

試験期間：昭和 45 年～

担 当 G：生産技術G（各農試と分担）

目 的：新しい殺菌剤および殺虫剤の花き・野菜の病虫害に対する防除効果と薬害の有無ならびにその実用性を検討する。

(5) 病虫害発生予察調査

試験期間：昭和 16 年～

担 当 G：生産技術G（各農試と分担）

目 的：各地の病虫害発生状況と気象等を踏まえて病虫害の発生を予察し、効率的な防除に資する。当場ではねぎの病害を調査する。

4. 地域支援に関する試験等

令和 7 年度は、実施していない。

V 研修事業の概要

1. 概 要

本道における花き・野菜の生産振興を支援するため、新技術（品種）の迅速な普及定着や生産を担う人材の育成等を目的とした技術研修を実施した。

2. 研修事業の推進

北海道花き・野菜技術研修に対する理解を深めるため、農業高校・農業改良普及センター、市町村等への訪問、農業関係団体主催会議にて事業説明を実施した他、場内の専門委員会（研修事業運営委員会）で、計画の策定、事業の円滑な実施・運営等について検討・調整を行った。

(1) 研修事業説明等

- 1) 北海道農業担い手育成センター事業等推進会議（札幌市）
- 2) 高校大学等（道立農業大学校、ニセコ高等学校、大野農業高等学校、新十津川農業高等学校、北海道高等学校長協会農業部会総会（札幌市））
- 3) 市町村等（滝川市、北斗市、七飯町、森町、妹背牛町、秩父別町、雨竜町、北竜町、沼田町、標茶町）
- 4) 振興局（空知総合振興局、留萌振興局）
- 5) 農業改良普及センター（日高本所、渡島本所）
- 6) その他（陸上自衛隊滝川駐屯地、滝川市シルバー人材センター、道央農業振興公社、ピンネ農業公社、JA みついし、石狩管内指導農業士・農業士会、胆振管内指導農業士・農業士会、留萌管内指導農業士・農業士）

(2) 専門委員会開催内容

1) 研修事業運営委員会の構成(令和7年)

委員長：白井康裕（研究部長）

委 員：平澤尚江（総務課）

木村文彦・植野玲一郎・田縁勝洋・大久保進一・高濱雅幹（花き野菜 G）、西脇由恵・長田亨・佐々木純（生産技術 G）、八木亮治・大宮知・岡田延邦・堀川愛花（技術研修 G）、後藤昌人（技普課花野駐在）

事務局：技術研修 G

2) 開催内容

① 第1回委員会（5月14日）

ア) 協議事項

- ・総合技術研修
- ・フォローアップセミナー
- ・課題解決研修（品目別セミナー等）

イ) 報告事項

- ・専門技術研修の受講予定
- ・SNS の開設
- ・新技術セミナー
- ・ベーシックセミナー

② 第2回委員会（11月14日）

ア) 協議事項

- ・2025 年度ベーシックセミナー
- ・課題解決セミナー

イ) 報告事項

- ・新技術セミナー開催案

③ 第3回委員会（12月9日）

ア) 協議事項

新技術セミナーについて

- ・開催方法・日程
- ・発表課題候補
- ・提出資料

④ 第4回委員会（3月23日）

ア) 協議事項

- ・令和8年度総合技術研修
- ・専門研修
- ・ベーシックセミナー、新技術セミナーのアンケート結果
- ・新技術セミナー掲示ポスター選定
- ・研修の年間スケジュール

3. 北海道花き・野菜技術研修

(1) 専門技術研修

高度な専門技術の習得を目指す技術指導者を対象に各種分析技術等の個別指導を行った。

◇ 専門技術研修受講者数

区 分	受講者数
野菜栽培コース	12 名
土壌肥料コース	4 名
合計（延べ）	16 名

◇ 専門技術研修受講者及び研修内容

氏 名	所 属	期 間	主な研修内容
平澤さとみ	滝川市	5/30～ 9 回	野菜栽培
渡邊真由美			
谷口遥都	道農業大学校	6/2～6/20	野菜栽培
中山颯太	ホクレン	6/16～6/27	土壌肥料
本間 迅			
武谷小春			
水上幸大	ホクレン肥料		
印南亨哉	ホクレン	7/15～7/16 8/26～8/28	野菜栽培
白川結美子			
濱田知快			
山口優真			
吉村 好			
須藤正也	ホクレン農総研		
小川麻奈			
高橋啓太			
佐々木風	森町	1/30	野菜栽培

(2) 総合技術研修

生産者、技術指導者を対象に、基礎知識から実践技術までの習得を目的に編成したカリキュラムに基づき総合的な指導を行った。

◇ 期間 令和7年 4月8日～10月3日

◇ 受講者数 野菜コース 2名

◇ 総合技術研修の受講者

氏 名	所属等	備 考
内 藤 春 花	深川市	花きコース
山 田 夏 夫	余市町	野菜コース

◇ 総合技術研修の実施内容

区分	主な内容(講師)	時 間
講義	・花・野菜技術センターの役割と試験研究（白井研究部長） ・農業分野における普及と開発（ス波上席普及指導員(技術普及室)） ・土壌診断施肥設計（長田主査(生産技術G)） ・花き栽培概論（田縁主任主査(花き野菜G)） ・野菜栽培概論（植野主査(花き野菜G)） ・病害虫の基礎（西脇研究主幹、佐々木主任主査(生産技術G)） ・園芸施設・資材の基礎（八木研究主幹(技術研修G)） ・土壌肥料の基礎（長田主査(生産技術G)） ・養液・環境制御技術の基礎（大久保主査(花き野菜G)） ・パイプハウスの組立（八木研究主幹(技術研修G)） ・農業制度金融の概要（株式会社日本政策金融公庫、北海道空知総合振興局） ・経営管理概論（税理士法人中央総合会計） ・北海道の新顔野菜及び直接販売の現状と課題（渡辺農事株式会社） ・農地制度の基礎（一般社団法人北海道農業会議） ・新規就農ガイダンス（公益財団法人北海道農業公社） ・病害虫防除技術（害虫）（中央農業試験場） ・病害虫防除技術（細菌病・糸状菌病）（佐々木主任主査(生産技術G)） ・園芸用機械と農作業安全講習（中央農業試験場） ・GAP制度及び北のクリーン農産物表示制度（YES!clean）の概要について（北海道農政部） ・野菜の流通と市場システム（ス波上席普及指導員(技術普及室)） ・花きの流通と市場システム（後藤主任普及指導員(技術普及室)） ・雑草防除の基礎（公益財団法人日本植物調節剤研究協会） ・農業用ドローンの基礎（ヤンマーアグリジャパン株式会社） ・主要花きの基礎（田縁主任主査(花き野菜G)、大宮主任主査(技術研修G)、後藤主任普及指導員(技術普及室)） ・花きの輸送と品質保持（後藤主任普及指導員(技術普及室)） ・主要野菜の基礎（木村研究主幹、大久保主査、高濱主査、嶋倉研究職員(花き野菜G)、八木研究主幹、大宮主任主査(技術研修G)） ・青果物の内部品質と鮮度保持（松岡研究	花き 53 時間 野菜 57 時間

	職員(生産技術 G)	
演習	・ 培土づくり (八木研究主幹(技術研修 G)) ・ 施肥設計の計算 (長田主査(生産技術 G)) ・ 環境制御操作 (植野主査、高濱主査(花き野菜 G)) ・ 土壌診断 (長田主査(生産技術 G)) ・ 土壌の生成及び土壌改良 (長田主査、三原研究職員(生産技術 G)) ・ パイプハウス設置、解体 (八木研究主幹(技術研修 G)) ・ 病虫害防除技術 (害虫) (中央農業試験場) ・ 病虫害防除技術 (細菌病・糸状菌病) (佐々木主任主査(生産技術 G)) ・ 作業機械操作 (門田専門主任(技術研修 G)) ・ 雑草防除技術 (公益財団法人日本植物調節剤研究協会) ・ 農業用ドローンの操作実習 (ヤンマーアグリジャパン株式会社) ・ 主要花き栽培管理等 (大宮主任主査(技術研修 G)、後藤主任普及指導員(技術普及室)) ・ 主要野菜栽培管理等 (大久保主査(花き野菜 G)、八木研究主幹、大宮主任主査(技術研修 G)) ・ 青果物の内部品質と鮮度保持 (松岡研究職員(生産技術 G)) ・ 総合技術研修報告会 (技術研修 G)	花き 59 時間 野菜 85 時間
実習	主要花き・野菜の栽培管理(花き 2 品目、野菜 3 品目(講師は講義・演習と同じ))	花き 443.5 時間 野菜 411 時間
その他	農作業安全研修、スマート農業セミナー、フォローアップセミナー、アスパラガス枠板式高畝栽培フィールドセミナー、現地視察、ミーティング、栽培計画書作成、栽培管理実績書作成等	花き 291.5 時間 野菜 222 時間
合計		847 時間

(3) 基礎技術研修 (ベーシックセミナー)

花き及び野菜栽培を志向する新規就農者等の支援を目的に花・野菜栽培に関する基礎知識や技術についての指導を行った。

◇ 期間 令和 8 年 1 月 26 日～30 日 (5 日間)

◇ 受講者数 花き 5 名、野菜 19 名、計 25 名

◇ 基礎技術研修の実施内容

講 義 名	時 間	講 師
経営管理の基本	共通 2 時間	外部講師
土壌改良と施肥管理	共通 2 時間	長田主査
園芸栽培概論	共通 1 時間	白井研究部長
花きの輸送と品質保持	花き 1 時間	後藤主任普及指導員
メロン	野菜 1 時間	八木研究主幹
研究紹介 (冬野菜)	共通 1 時間	高濱主査
農地制度の基本	共通 2 時間	外部講師
園芸資材の特性と利用	共通 1 時間	植野主査
環境制御装置		
養液栽培	共通 1 時間	大久保主査
スターチス	花き 1 時間	鈴木場長
いちご	野菜 1 時間	木村研究主幹
ゆり	花き 1 時間	大宮主任主査
さつまいも、にんにく	野菜 1 時間	高濱主査 嶋倉研究職員
デルフィニウム	花き 1 時間	後藤主任普及指導員
アスパラガス	野菜 1 時間	嶋倉研究職員
北海道の新顔野菜・直接販売	共通 2 時間	外部講師
花きと野菜の病虫害	共通 2 時間	佐々木主任主査
カーネーション	花き 1 時間	大宮主任主査
ブロッコリー	野菜 1 時間	嶋倉研究職員
アルストロメリア	花き 1 時間	鈴木場長
ねぎ	野菜 1 時間	植野主査
宿根かすみそう	花き 1 時間	鈴木場長
きゅうり	野菜 1 時間	斯波上席普及指導員
トルコギキョウ	花き 1 時間	大宮主任主査
トマト・ミニトマト	野菜 1 時間	大久保主査
きく	花き 1 時間	高濱主査
かぼちゃ	野菜 1 時間	八木主幹
園芸用機械の基礎及び農作業安全	共通 2 時間	白井研究部長
働きやすい選花場	花き 1 時間	後藤主任普及指導員
野菜の流通と内部品質	野菜 1 時間	松岡研究職員
花きの市場と販売	花き 1 時間	後藤主任普及指導員
だいこん、にんじん	野菜 1 時間	植野主査
露地花き類	花き 1 時間	大宮主任主査
スイートコーン	野菜 1 時間	八木研究主幹
最新の農業技術に関する話題と農業の技術開発と普及	共通 1 時間	斯波上席普及指導員

(4) 課題解決研修

農業試験場が開発した技術や品種の迅速な普及・定着、生産技術の高位平準化、産地の育成等を目的とした各種セミナーを開催した。

1) フォローアップセミナー

花き・野菜技術研修の過年度修了者を対象に技術支援及び研修受講者間の情報交流を目的に開催した。

◇開催日 令和7年6月19日

◇場 所 花・野菜技術センター

◇内 容

- ・研究概要の紹介
- ・研修ほ場の紹介
- ・意見交換

◇受講者数 5名

2) アスパラガス柵板式高畝栽培フィールドセミナー

道内におけるアスパラガスの生産振興及び生産者の収益向上に資するため、「柵板式高畝栽培」システムの適用性や活用事例を紹介し、関

係者間で共有・情報交換を行う事を目的に開催した。

◇開催日 令和7年8月21日

◇場 所 対面及びオンライン開催

◇内 容

ア 基調講演

アスパラガスの柵板式高畝栽培の現状とこれから

国立研究開発法人

農業・食品産業技術総合研究機構

イ 講演

多雪地帯のアスパラガスハウス立茎栽培における柵板式高畝栽培システムの適用性

ウ 圃場見学

花・野菜技術センター圃場見学

◇受講者数 77名

(現地39名、オンライン参加38名)

4. 研修ほ場等作付概要

注) 総合技術研修共通栽培品目のみ掲載。

区分	品 目	品 種	作 型
品種比較	アスパラガス	ガインリム、ゼンユウガリバー、ウエルカム、ウエルカム AT	春どり露地 (定植7年目)
品種比較 栽培法	さつまいも	べにはるか、シルクスweet (植え方：舟底植え、斜め植え) (マルチ：透明、緑、黒、なし)	露地早熟
品種比較 栽培法	かぼちゃ	えびす、グラッセ、ケント、くり将軍、くり五郎 (標植、密植)	露地セル育苗 (ケントのみ直播も実施)
品種比較	スイートコーン	恵味ゴールド、ほしつぷコーン、ドルチェドリーム、ゴールドラッシュ	露地直播 (8月どり)
品種比較	メロン	ルピアレッド219、ファイングリーン、ティアラ30、ティアラ30+どうだい6号 (接ぎ木栽培)	無加温半促成

VI 研究発表並びに普及事項

1. 研究報告・資料

(1) 研究報告

○森 万菜実・西脇由恵. *Alternaria brassicae* によるブロッコリー黒すす病の発生 (病原追加). 北日本病害虫研究会報. 76. 28-31

(2) 口頭発表

○高濱雅幹 (花野花野)、古山真一 (県立広島大). 低温がボーレコールの生育, 乾物率および Brix 値に及ぼす影響. 園芸学会令和 7 年度秋季大会 (2025. 9. 21).

○高濱雅幹・大久保進一・嶋倉直也・長田亨・保田浩・長南友也・佐藤文生. バイオ炭施用がキャベツの収量・品質に及ぼす影響. 北海道園芸研究談話会研究発表会 (2025. 12. 7).

○嶋倉直也. 植付時期の違いがにんにくの生育にあたる影響. 北海道園芸研究談話会研究発表会 (2025. 12. 7).

○野田智昭 (上川技術)、松岡祐樹 (花野技術)、梶田路津子 (中央品質)、引地達也 (MGC). プラスチックフィルムを用いない AMS によるブロッコリーの鮮度保持輸送. 園芸学会令和 8 年度春季大会 (2026. 3. 21).

(3) 著書・資料

○植野玲一郎. 北海道野菜地図 (その 49). 北海道野菜地図編集委員会 (北海道農業協同組合中央会、ホクレン農業協同組合連合会) 共著. (2026).

○大宮 知. 北海道フラワーガイド (その 34). 北海道フラワーガイド編集委員会 (北海道農業協同組合中央会、ホクレン農業協同組合連合会) 共著. (2026).

○西脇由恵. 北海道病害虫防除提要 (第 8 版). 北海道植物防疫協会 共著. (2025).

○佐々木 純. 北海道病害虫防除提要 (第 8 版). 北海道植物防疫協会 共著. (2025).

(4) 専門雑誌・記事等

○嶋倉 直也・西脇 由恵. アスパラガスの病害を断つ: 道内の栽培体系と防除の現状. ニューカンントリー. 859 : 12-14 (2025)

○嶋倉 直也. アスパラガス 1 株当たりの収量が倍増, 作業姿勢改善により軽労化 ハウス長期どり作型での枠板式高畝栽培. ニューカンントリー. 862:88-89 (2026))

○大久保進一. 加工用にんじんの安定供給を目指した栽培・出荷体系. ニューカンントリー. 864: 52-53 (2026)

(5) 新聞記事・広報誌・放送等

○大久保進一. 加工用にんじんを 4 月まで安定供給!. 農業共済新聞. 2025 年 9 月 24 日 (2025)

(6) 出願公表

該当なし

(7) 品種登録

該当なし

(8) 受賞

○佐々木純. 令和 7 年度地方独立行政法人北海道立総合研究機構職員表彰 知事賞. にんにく種苗の安定的な増殖を可能とする新規ウイルス検査法の開発とウイルスフリー種苗管理技術の開発. 2025

○八木亮治. 第 86 回 (令和 7 年) 北農賞. 品種部門: メロン台木「どうだい 4 号」、「どうだい 6 号」. 2025

2. 印刷刊行物

該当なし

3. 普及事項

(1) 普及奨励事項

該当なし

(2) 普及推進事項

該当なし

(3) 指導参考事項

○露地野菜に対するプラスチックを用いない肥効調節型肥料の施用効果

○養分収支と肥料価格を考慮したたまねぎに対するリン酸施肥指針

○かぼちやの直播・密植・無整枝による省力多収栽培と長期安定出荷技術

○花ゆりの栄養障害簡易判別技術の開発

○令和 7 年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫

○たまねぎの灰色腐敗病に対するキノフメリン水和剤
F の効果
○にんじんの黒葉枯病に対するインピルフルキサム水
和剤F の効果

(4) 研究参考事項

該当なし

VII その他

1. 職員の研修・技能講習、資格取得

(1) 職場外研修（階層別、能力開発）

受 講 者	研 修 項 目	実施機関	場 所	期 間
安田 優理	新規採用職員研修 A	道総研本部	札幌市	R7. 4. 8-10
四十坊 供之	安全運転管理者講習	北海道安全運転管理者会協会	滝川市	R7. 7. 3
嶋倉 直也	研究課題立案研修	道総研本部	Web	R7. 9. 2-3
三原 州人	研究課題立案研修	道総研本部	Web	R7. 9. 2-3
西脇 由恵	衛生管理者講習会	北海道労働保険管理協会	Web	R7. 7. 23- 8. 21
木村 文彦	化学物質管理研修	道総研本部	Web	R7. 9. 26
西脇 由恵	化学物質管理研修	道総研本部	Web	R7. 9. 26
八木 亮治	化学物質管理研修	道総研本部	Web	R7. 9. 26
佐々木 純	化学物質管理研修	道総研本部	Web	R7. 9. 26
長田 亨	化学物質管理研修	道総研本部	Web	R7. 9. 26
松岡 祐樹	化学物質管理研修	道総研本部	Web	R7. 9. 26
三原 州人	化学物質管理研修	道総研本部	Web	R7. 9. 26

(2) 職場研修等（集合・伝達研修）

研 修 等	実施月日	内 容	人数
採用時安全研修	R7. 4～R7. 5	雇入れ時の教育（各グループ）	
職場研修	R7. 5. 14	農作業安全研修	37 人
職場研修	R7. 10. 22	救命講習	28 人

(3) 資格取得

取 得 者	取 得 免 許	交 付	取得月日
門田 修司	アーク溶接等特別教育	旭川市工業技術センター	R7. 7. 31
近嵐 勇	アーク溶接等特別教育	旭川市工業技術センター	R7. 7. 31
門田 修司	ガス溶接技能資格	旭川市工業技術センター	R7. 8. 28
近嵐 勇	ガス溶接技能資格	旭川市工業技術センター	R7. 8. 28
西脇 由恵	第一種衛生管理者免許	東京労働局長	R8. 4. 22

2. 見学・参観

月日	団体名	人数
4/14	ながめま農業協同組合	5
6/4	一般社団法人滝川国際交流協会	17
6/16	遠軽町立茎アスパラ生産組合	10
6/17	ふらの農業協同組合女性部	54
6/18	北いぶき農業協同組合 ブロッコリー生産組合	8
7/2	きら☆そら	12
7/10	長崎県立農業大学校	23
7/24	北海道立農業大学校畑作園芸経営学科施設部	7
8/5	一般社団法人滝川国際交流協会	12
8/21	ホクレン肥料株式会社	28
8/19	当別町農業総合支援センター	4
9/1	北海道「農」ネットワーク	25

月日	団体名	人数
9/16	拓殖大学北海道短期大学農学ビジネス学科	30
9/19	ホクレン農業協同組合連合会倶知安支所生産資材課	10
9/19	JA さっぽろ営農販売部営農課石狩市農業総合支援センター	3
9/30	公益財団法人道央農業振興公社	14
10/7	檜山農業改良普及センター	3
10/7	当麻農業協同組合	10
10/16	みついし野菜振興会	7
10/19	国立大学法人北海道大学農学部・大学農学院・大学農学研究院土壌額研究室	21
10/24	今金町農業協同組合今金町アスパラ生	8
11/4	日韓交流支援センター	20
11/17	出原 慧	1

3. 研修生の受入れ（研修事業以外）

(1) 普及指導員研修

1) スペシャリスト強化研修（野菜） 6/23～6/27

研修項目	対 象 者	担 当
主要野菜の現場対応に必要な課題解決手法の習得	空知農業改良普及センター空知南西部支所 市野 香菜美 十勝農業改良普及センター十勝北部支所 古川 将太 石狩農業改良普及センター石狩北部支所 稲垣 舞南 渡島農業改良普及センター渡島北部支所 山本 由実佳 日高農業改良普及センター日高西部支所 笹村 星夜 日高農業改良普及センター日高西部支所 北本 美穂 計 6 名	技術普及室 技術研修G 花き野菜G 生産技術G

2) スペシャリスト研修（花き） 6/23～6/27

研修項目	対 象 者	担 当
主要花きの現場対応に必要な課題解決手法の習得	空知農業改良普及センター空知南東部支所 芝木 致嘉 十勝農業改良普及センター十勝西部支所 太田 陽一郎 十勝農業改良普及センター十勝東部支所 澤崎 貴将 上川農業改良普及センター名寄支所 横市 拓摩 計 4 名	技術普及室 技術研修G 花き野菜G 生産技術G

3) 高度専門技術研修（野菜） 6/9～13, 7/28～8/1, 8/25～29

研修項目	対 象 者	担 当
野菜栽培に係る新技術および調査研究手法の習得	網走農業改良普及センター 中川 涼子 十勝農業改良普及センター 中野 寛之 計 2 名	技術普及室 技術研修G 花き野菜G 生産技術G

4) 高度専門技術研修（花き） 6/9～13, 7/28～8/1, 8/25～29

研修項目	対 象 者	担 当
花き栽培に係る新技術および調査研究手法の習得	渡島農業改良普及センター 弓削田 智美 空知農業改良普及センター中空知支所 鴨下 孝子 計 2 名	技術普及室 技術研修G 花き野菜G 生産技術G

5) 新任者早期養成研修

新任者早期養成研修Ⅱ 11/11～13

研修項目	対 象 者	担 当
自己課題研修の進捗確認と普及指導能力の向上	新任2年目の普及職員 22 名	技術普及室

4. 委員会活動

(1) 各専門委員会の構成

委員会名	委員長	事務局	委 員
業務委員会	技術研修G 研究主幹	—	委員長：八木亮治、平澤尚江（総務課）、大久保進一（花き野菜G）、松岡祐樹、佐々木純（生産技術G）、門田修司、北村将吾（技術研修G）
環境整備委員会	花き野菜G 研究主幹	—	委員長：木村文彦、林和奏（総務課）、佐々木純（生産技術G）大宮知、井口岳人（技術研修G）
図書委員会	生産技術G 研究主幹	—	委員長：西脇由恵、土肥直紀（総務課）、植野玲一郎（花き野菜G）、松岡祐樹（生産技術G）、堀川愛花（技術研修G）
研修事業運営委員会	研究部長	技術研修G	委員長：白井康裕、平澤尚江（総務課）、木村文彦、植野玲一郎、田縁勝洋、大久保進一、高濱雅幹（花き野菜G）、西脇由恵、長田亨、佐々木純（生産技術G）、八木亮治、大宮知、岡田延邦、堀川愛花（技術研修G）、後藤昌人（技術普及室）
情報システム委員会	生産技術G 研究主幹	—	委員長：西脇由恵、高濱雅幹（花き野菜G）、佐々木純（生産技術G）、堀川愛花（技術研修G）
施設・ほ場の利用計画検討委員会	研究部長	技術研修G	委員長：白井康裕、平澤尚江（総務課）、木村文彦、植野玲一郎、田縁勝洋、大久保進一、高濱雅幹（花き野菜G）、西脇由恵、長田亨、佐々木純（生産技術G）、八木亮治、大宮知、岡田延邦、門田修司（技術研修G）

（令和7年4月1日現在）

(2) 活動内容

1) 業務委員会

ア 委員会の開催

- ・通常：4月1日～10月31日、毎週1回
- ・冬期：11月1日～3月31日、毎月1回
- ・拡大：4月17日

イ 主な検討事項

- ・週間・月間作業計画
- ・ほ場、ハウス、温室等施設の利用計画

2) 環境整備委員会

ア 委員会の開催

- ・第1回（令和7年4月11日）：本年の活動内容の協議
- ・第2回（令和8年3月11日）：本年度の活動報告と反省

- イ 十勝道路沿いゴミ拾い（令和7年4月30日）：滝川市役所のクリーンデーに連動して実施。

ウ 敷地内樹木の管理：総務課および技術研修グループ（圃場管理職員）により随時実施。

エ ラベンダー花壇の管理：花き野菜グループパートタイム職員により、随時除草を実施。

3) 図書委員会

- ・第1回委員会（書面、令和7年11月11日）：図書室に配架する書籍、雑誌の取り扱いについて
- ・第2回委員会（書面、令和8年3月4日）：R8年度定期購読雑誌の確認について
- ・第3回委員会（書面、令和8年3月17日）：図書室に配架する書籍、雑誌の取り扱いについて
- イ 図書の整備（購入）および管理に関すること
- ・定期購読学会誌等の製本および整理を実施

4) 研修事業運営委員会

V 研修事業の概要参照

5) 情報システム委員会

ア 委員会の開催

- ・本年度は開催なし

イ 法人情報システム（含むホームページ）の管理・運営に関すること

- ・IT資産管理システムの導入と操作方法の習得
- ・PC更新に伴うIT資産管理システムへの対応
- ・道総研ウェブアクセシビリティに対応したホームページの修正

5. 公開デー2025

8月6日（木）に実施（来場者数：93名）

(1) 屋内会場の催し物

- フラワーアレンジメント
- お花の染色実験（花き野菜G）
- 病虫害診断コーナー（生産環境G）
- 土壌診断コーナー（生産環境G）
- 園芸相談コーナー（技術普及室）
- 苗当てクイズ（花き野菜G）
- 試験研究ポスター展示
- 研修生による生産物販売（技術研修G）
- スターチス、ミニトマト、スイートコーン、メロン

(2) 屋外会場の催し物

- 農業機械展示（技術研修G）
- バスによる圃場見学

6. 令和7年度 花・野菜新技術セミナー

新たに開発した花・野菜の品種や栽培技術等の研究成果を発表し、地域への速やかな普及定着を図ることを目的としたセミナーを開催した。

◇開催日 令和8年2月24日

◇場所 オンライン開催

◇内容

ア 新技術の紹介

- ①花ゆりの栄養障害簡易判別技術の開発
花・野菜技術センター
- ②燃料削減と増収を両立！ 環境制御によるアルストロメリアのハウス栽培
道南農業試験場
- ③プラスチック被覆肥料に頼らない露地野菜への代替資材
道南農業試験場

④土壌の蓄積リンを積極活用！

たまねぎの新しいリン酸施肥
北見農業試験場

⑤年明けも道産かぼちゃを食卓に！

～栽培技術編～

花・野菜技術センター

⑥年明けも道産かぼちゃを食卓に！

～貯蔵技術編～

花・野菜技術センター

◇受講者数 152名

7. 講師等の派遣

○植野玲一郎. 空知農業改良普及センター中空知支所にんにく栽培講習会. JAピンネ本店

(2025. 11. 21)

○嶋倉直也. 空知農業改良普及センター中空知支所にんにく栽培講習会. JAピンネ本店

(2025. 11. 21)

○嶋倉直也. JA北いぶきブロッコリー生産組合ブロッコリー栽培技術講習会. 秩父別温泉ちっぷ・ゆう&ゆ(2026. 2. 17)

○八木亮治. 長いも種子選抜. JAようてい長いも生産組合(2025. 11. 6)

○八木亮治. 夕張メロン栽培講習会. 夕張メロン組合(2026. 2. 10)

○大宮知. とかち花き研究会現地研修会(2025. 9. 18)

○佐々木 純. 花・野菜技術センターにおけるにんにく研究の取り組み. 空知農業改良普及センター中空知支所(2025. 5. 14)

○佐々木 純. 花・野菜技術センターにおけるにんにく研究の取り組み. 空知農業改良普及センター中空知支所(2025. 11. 21)

○西脇由恵. かぼちゃの直播・密植・無整枝による省力多収栽培と長期安定出荷技術. 北海道野菜セミナー2026(2026. 2. 3)

○西脇由恵. 年明けも道産かぼちゃを食卓に～おすすめ品種と省力栽培貯蔵技術～. 令和7年度胆振地域農業技術支援会議（地域関係者会議）(2026. 2. 27 オンライン)

○西脇由恵. ブロッコリーの病虫害防除について. ホクレン担い手向け Web 研修会 (ブロッコリー). (2026. 3. 9 オンライン)

○松岡祐樹. 北海道の農産物と品質特性. 京都大学大学院農学研究科. (2026. 2. 7)

○鈴木亮子. みついし花き振興会切花品評会. 新ひだか町総合町民センター (2025. 6. 26)

○鈴木亮子. 第 45 回北海道花き品評会切り花の部. 札幌花き地方卸売市場 (2025. 7. 24)

○鈴木亮子. 第 45 回北海道花き品評会鉢花の部. 札幌花き地方卸売市場 (2025. 11. 19)

8. 各種委員

○白井康裕. 北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド作成検討委員

○木村文彦. 北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド作成検討委員

○大宮 知. 北海道フラワーガイド編集委員

○植野玲一郎. 北海道野菜地図編集委員

○大久保進一. 北海道経済部地熱・温泉熱アドバイザー

○大久保進一. 北海道養液栽培研究会幹事

○高濱雅幹. 北海道養液栽培研究会幹事

○鈴木亮子. 北海道園芸研究談話会幹事長

○木村文彦. 北海道園芸研究談話会総務幹事

○高濱雅幹. 北海道園芸研究談話会会報編集委員

○佐々木純. 北海道病虫害防除提要編集委員

○西脇由恵. 日本植物病理学会編集委員

○西脇由恵. 北日本病虫害研究会評議員

○西脇由恵. 北海道植物防疫協会委託試験 試験委員

Ⅷ 自己点検への対応

事 項	件数等		
	R7	R6	R5
各機関へ直接寄せられたニーズ把握件数	0	0	0
研究成果発表会・企業向けセミナーの開催件数	2	2	3
同参加者数	222	158	336
研究会等の開催件数	0	0	2
展示会等への出展件数	0	0	0
研究報告書の発行件数	0	0	0
技術資料の発行件数	0	0	0
その他紙媒体発行件数	0	0	1
普及組織との連絡会議等開催件数	8	5	5
企業等へ訪問し広報活動した件数	0	13	4
行政や企業等で活用された成果の数	0	0	0
設備使用の件数	0	0	0
研究成果発表会・企業向けセミナーによる公表件数	9	4	4
研究会における公表件数	0	0	0
学会誌等への投稿件数①学会誌	1	1	5
学会誌等への投稿件数②雑誌（専門誌、商業誌）	3	4	12
学会誌等への投稿件数③書籍	4	18	0
学会誌等への投稿件数④新聞	1	0	3
学会誌等への投稿件数⑤その他	0	0	2
研究報告書での発表件数	0	1	0
学会やシンポジウム等での発表件数	4	6	0
ホームページ等による公表件数	0	0	0
プレスリリース、定例報道懇談会の件数	3	1	0
学会役員・委員件数	14	7	7
技術相談の実施件数	785	456	521
技術指導の実施件数	247	40	3
講師等派遣の実施件数	12	3	10
技術審査の実施件数	3	5	5
研修会・講習会の開催件数	3	2	2
同参加人数	104	36	34
研修者の受入人数	109	110	68
道関係部との連絡会議等の開催件数	0	5	0
市町村との意見交換等の開催件数	5	0	1
関係団体との意見交換等の開催件数	2	1	6
道民意見把握調査の回答数	116	69	44
出前授業の実施件数	0	0	0

事 項	件数等		
	R7	R6	R5
国内研修Ⅱ（外部講師招聘・受け入れ件数）	0	0	0
国内研修Ⅰの派遣件数	0	0	0
国内研修Ⅱの派遣件数	7	6	3
道民向けイベントの開催件数	1	1	1
同参加人数	147	97	175
国際協力事業等への協力件数	3	0	1
同参加人数	49	0	11
災害等に関係した技術指導件数	0	0	0
災害等に関係した委員派遣人数	0	0	0
ホームページ発信・更新件数	10	12	9
メールマガジン発信件数	0	0	0
フェイスブック発信件数	0	0	0
その他電子媒体発信件数	115	0	0
職場研修実施件数	2	3	3
グリーン購入の金額（千円）	116	209	106
視察・見学者の受入件数	23	20	12
同人数	332	266	191

本年報に記載した内容の無断転載、二次利用は固くお断りします。

ISSN 1346-7506

令和7年度(2025)

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
花・野菜技術センター年報

令和8年7月 発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 花・野菜技術センター

〒073-0026 北海道滝川市東滝川735番地
Tel. 0125-28-2800(代表・総務課)
Tel. 0125-28-2291(花き野菜グループ)
Tel. 0125-28-2292(生産技術グループ病虫)
Tel. 0125-28-2293(生産技術グループ栽培環境)
Tel. 0125-28-2211(技術研修グループ)
Tel. 0125-28-2212(技術普及室)
Fax. 0125-28-2165 (総務課)
Fax. 0125-28-2299 (研究部、技術普及室)
